保護者のみなさま

令和６年　３月　４日

令和 5 年度学校評価アンケートの結果分析について

東京都世田谷区立給田小学校
学校関係者評価委員会
委員長　稲 井　達 也
（大正大学教授・附属図書館長）

標記の件について、下記のとおりご報告致します。

記

１.総評

児童、保護者は依然として概ね高い結果といえます。経年比較でみると下がってはいますが、過去のコロナ禍の学校評価では評価が格段に高かったこともあり、けっして低いとはいえません。

その一方で、自由意見の一部には、友だちや教員に対する厳しい意見がみられました。学校生活やふだんの生活に対してナーバスな感情がみえるところが気になりました。

教員と児童、児童と保護者とのコミュニケーションの在り方がコロナ禍を経た現在では大きく変化しています。現在の高学年は低学年時よりコロナ禍でマスク生活により、大人の表情を見ても目だけで読み取らざるを得ない時代が長く続いたため、児童にとっては大人の表情を読み取るのが難しいことが考えられます。従って、大人は言葉による児童とのコミュニケーションを一層工夫する必要があります。

保護者の意見は概ね好意的なものが多くみられました。保護者の全体的な意見とするためには、回収率を上げる必要があります。

コロナ禍を経て、保護者の労働環境の変化も生じており、保護者が学校に行く機会が減って、学校への参加意識が低下する傾向も見られます。

保護者は大人の目線で教員の努力や成果を子供に伝えていくことも必要です。

コミュニケーションの在り方の変化に対応し、教員と保護者との間に行き違いや理解不足が生じないように、両者が不断の努力を積み重ねていくことが求められます。

働き方改革に伴う限られた勤務時間の中で、教員と保護者が対面でコミュニケーションを取るための時間は限られていますが、たとえそうであっても、対話的なコミュニケーションを行うことは必要です。

ポスト・コロナの現在、新たな価値観の中で、わがままは抑え、他者への思いやりと寛容さに努めることが必要な時代を迎えています。総じて良好な評価結果となりましたが、小さな変化はみられました。本校にとって来年度は転換点となる時期と考えます。

２.児童の評価結果分析

コロナが落ち着いてきたという状況であるといえます。今年度に限っては数値のみで見た結果は概ね良好といえます。

ただし、「(2) 学校が好き」は 5.0 下がり、「(1) 学校生活は楽しい」も減少しています。また、総評で指摘したように、自由記述には友だちや教員との関わりの難しさが散見されました。コロナを経ての児童の変化とみることもできますので、教員、保護者の子どもたちへの関わり方をこれまでよりも一層工夫する必要があります。

「(1) 自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある」は昨年度よりも 6.4 ポインと上がったにもかかわらず、「(2) 目標をもち、その実現に向けて努力している」は 7.1 ポイント下がっています。つまり、児童に考える場はあっても、自分の目標を十分には持たせられてはいないと推察されます。

児童のナーバスな自由記述に関してですが、コロナ禍でのコミュニケーションの変化や、LINE などの SNS によるコミュニケーションは、児童の自己肯定感に少なからず影響を与えていることが考えられます。

３.保護者の評価結果分析

保護者の意見は概ね好意的なものが多く見られました。保護者の回収率は上げる必要があります。コロナ禍を経て、保護者の労働環境の変化が生じており、保護者が学校に行く機会が減り、学校への参加意識が低下する傾向が推察されます。このことは回収率の変化にも影響していると考えます。

「(1) 学習指導について」「(3) 本校は、子どもが考えたことを話し合ったり、発表しあったりする機会がある」は 5.7 ポイント上昇、「(4) 本校は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。」は、6.4 ポイント上昇となっています。

ICT 活用については、実際に日常的に活用している児童に比べて、保護者にとっては ICT 活用の具体的な場面が想定しにくいことが考えられます。今後は、授業公開などの場面を通して、学習における ICT 活用への保護者の理解を一層促していくことが求められます。

キャリア教育については、依然として昨年度同様に十分な理解が得られていない面が見られます。「キャリア教育」は、職業指導ではなく、小学校の発達段階に即して、在り方生き方を考えさせる教育です。今後は、学年保護者会で 1 年から 6 年までのキャリア教育の全体計画を重点的に説明したり、キャリア教育の教育活動を公開したりするなどの工夫が求められます。

「6.　全般について」と「(3) 本校は、近隣の（幼）・小・中学校で構成する「学び舎」による幼稚園、小学校、中学校の連携や交流活動が行われている」は昨年比で数値が高くなっています。「学び舎」に対する理解が深まってきたといえます。

４.地域の評価結果分析

回答率が上がったことや、新型コロナウイルス感染症の社会状況が落ち着いたことにより、学校への出入りが少しずつ増え、コロナ前に戻りつつあることから、その結果、厳しい

意見も見られました。地域が子どもたちを厳しくもあたたかく見守ってくれている証左でもあると考えます。

学校の運営（4「(1) 学校の重点目標が明確である」は、18.9 ポイント下がり、「(2) 地域の意見に対して、学校は丁寧に説明がある」は 11.7 ポイント下がっています。地域とのかかわりについては、「(2) 学校は、安全性を高めようと地域と協力している」で 13.8 ポイント下がっています。地域の人びととの密接な関わりがコミュニティスクールの肝といえます。給田小学校の学区域では、宅地開発とともに新たに転居してきた住民も少なくないようです。これまでとは地域の状況はやや異なります。地域との関わり方への改善が求められます。

５.今後に向けて

これまで給田小学校は多くの地域の人びとによって支えられてきました。今後は学校公開の機会を増やし、地域の人びとが「わがまちの給田小学校」という地域と本校との距離感を再構築する必要があります。

コロナ禍を経て、デジタル社会の推進、デジタル・トランスフォーメーション(DX)の推進という社会状況の大きな変化により、SNS やメールでのコミュニケーションが効率的なこともあり、増加傾向にあります。また、同時に対面によるコミュニケーションも大きく変化してきています。とりわけ、児童はデジタル・ネイティブであり、対面のコミュニケーションが苦手な児童もいることが考えられます。

スマートフォンが児童にも身近になりつつあり、児童は大人と同様にインターネットや SNS で多くの動画等のデジタル情報に接している児童もいることが考えられます。大人とは感覚が異なりつつあります。今後は、児童もコスパ(コスト・パフォーマン)とタイパ(タイム・パフォーマンス)を重視していくことも考えられます。

児童はいわゆるデジタル・ネイティブです。教室から教員が見ている児童の様子、家庭で保護者から見えている児童の様子とは異なる面があります。児童によっては LINE などによるコミュニケーションの独自の世界があります。

このようなコミュニケーションは、大人たちには垣間見ることが困難です。しかし、間違った情報や誹謗中傷を防ぐためには、注意深く気にかけておく必要がありますし、適切な SNS の使い方の情報モラルの指導も必要に思われます。

児童を取り巻く状況の変化を見据えた大人たちのかかわりが求められます。コミュニケーションの変化について、だれもが敏感になり、対話の重要性を改めて実感し、実践していく努力が大切です。

※

学校評価のねらいの一つは学校経営の改善とともに、教職員が問題意識を共有し、より良い学校づくりに向けて実践を積み重ねていくための契機にすることと考えます。

昨年度、学校運営委員会から指摘されていましたが、教職員が学校評価の結果を共有し、職員会議や校内研修の場でフィードバックし、教職員全体で協議することにより、よりよい実践につながることを期待しています。

教員の成り手が不足し、教員不足が深刻化する中で、毎日子どもたちとかかわり、不断の

努力を積み重ねている校長、副校長、教員一人ひとりの力が、「チーム給田」という総合力として、さらに高まることを願っています。